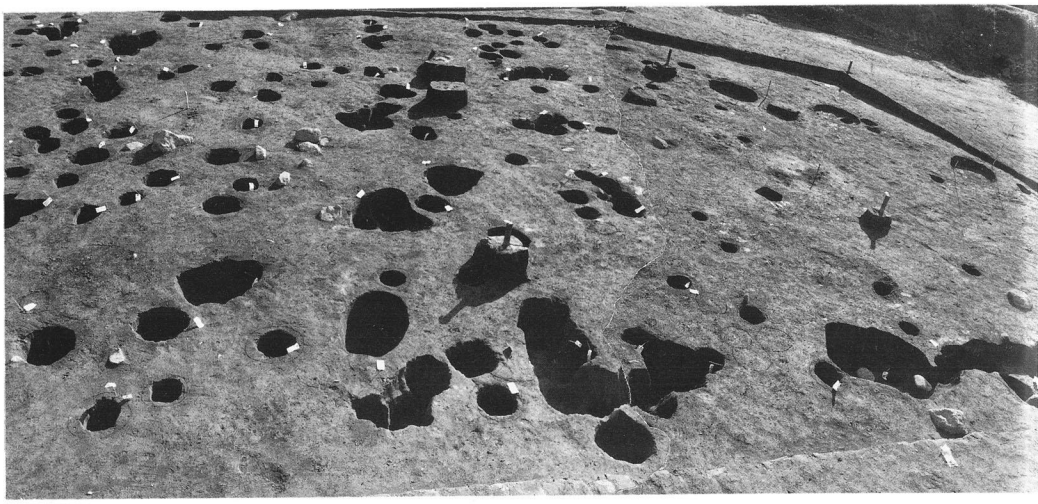
図版　10

1．掘立柱建物址群南部(北方より)

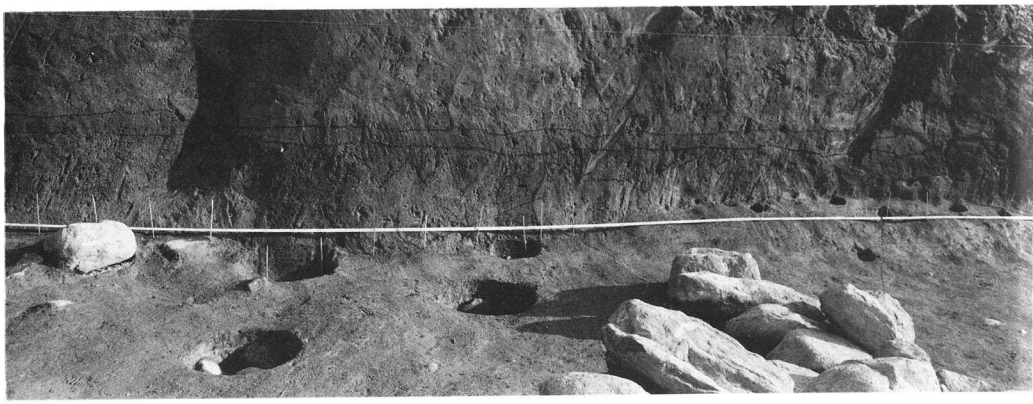
第5号址～18号址



2．同上 北部

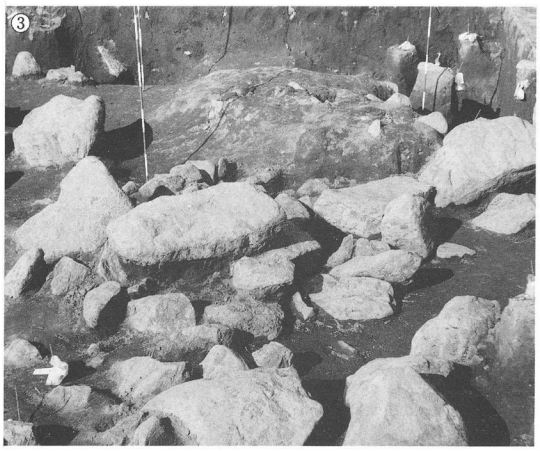
（北方より）

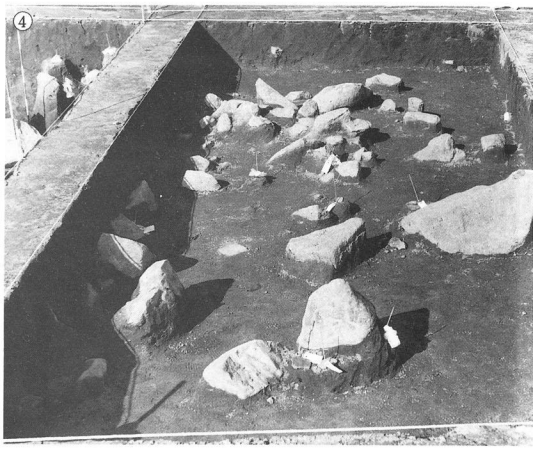
3．掘立柱建物第29号址断面出土状況



1．掘立柱建物址（14号址北側）と小柱列1号址(右上)
2．礎板出土状況

3．縄文時代配石址とローム・マウンド
4．同上





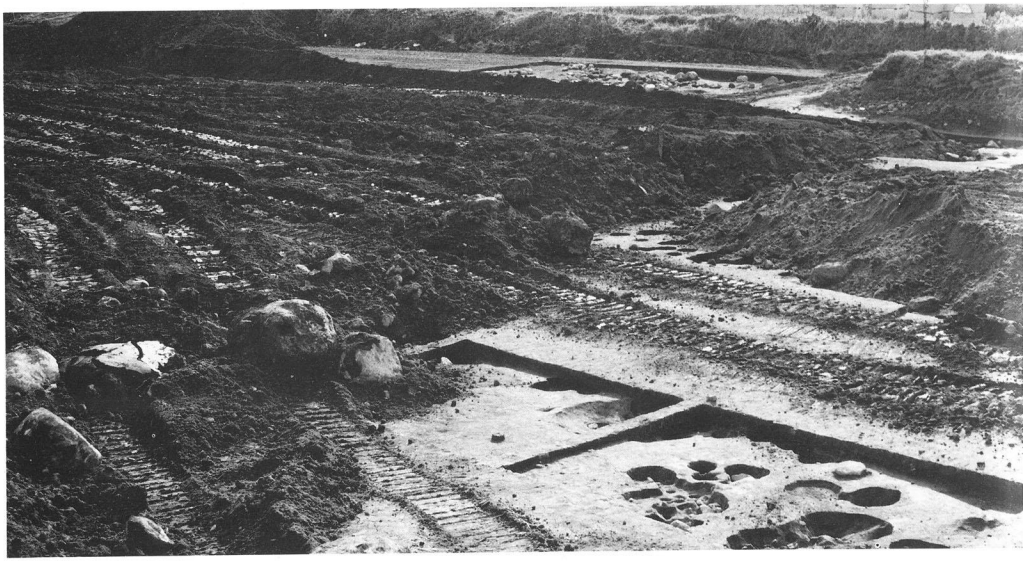
5．同上
6．縄文土器出土状況

7．石斧出土状況
8．横刃形石器出土状況

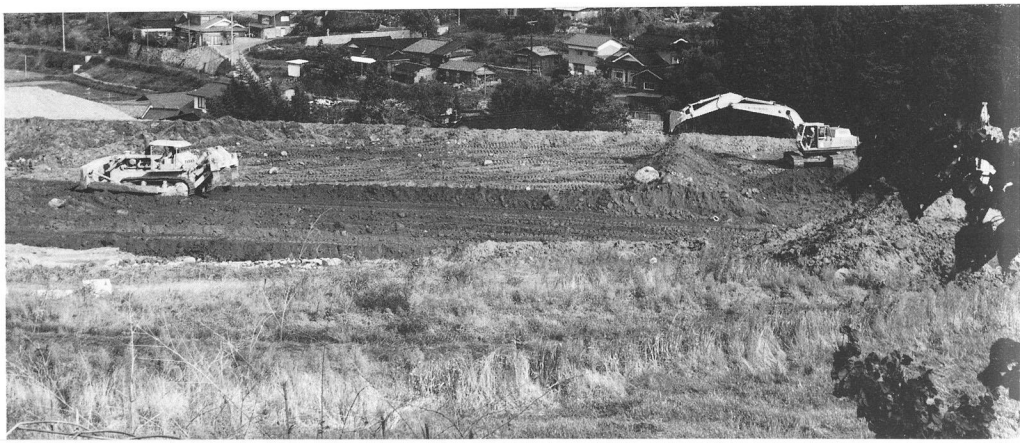
図版　12

1．　遺構保存作業状況
（西方より撮す）

2．　同上
（西方より撮す）



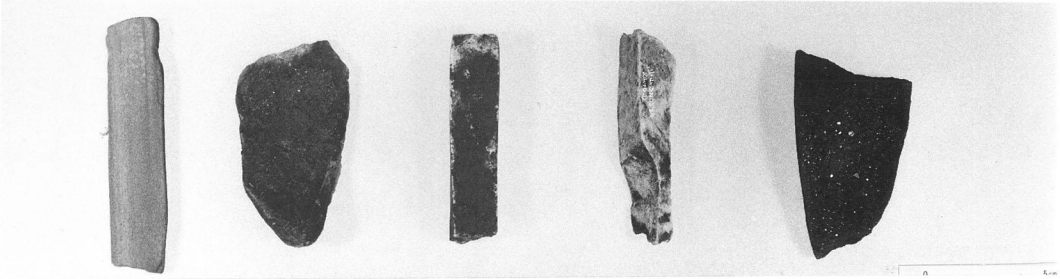
3．　同上
（南方より撮す）



1．出土陶器断欠
古瀬戸天目
古瀬戸鉄釉

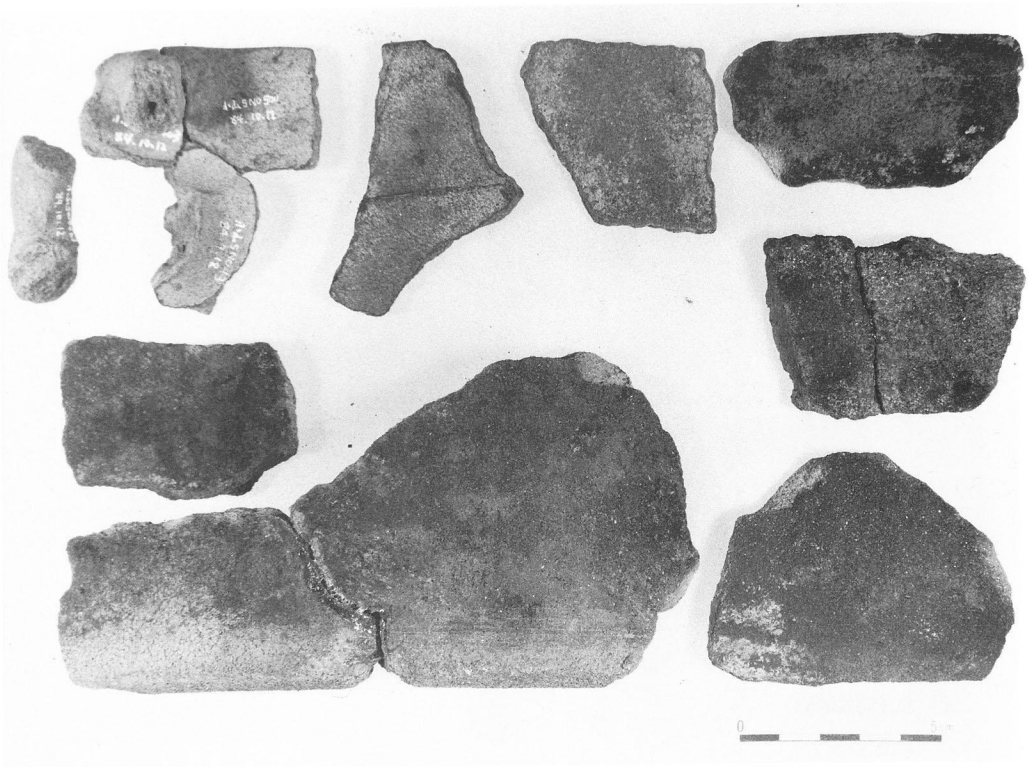
2．出土陶器断欠
古瀬戸灰釉

3．出土砥石断欠

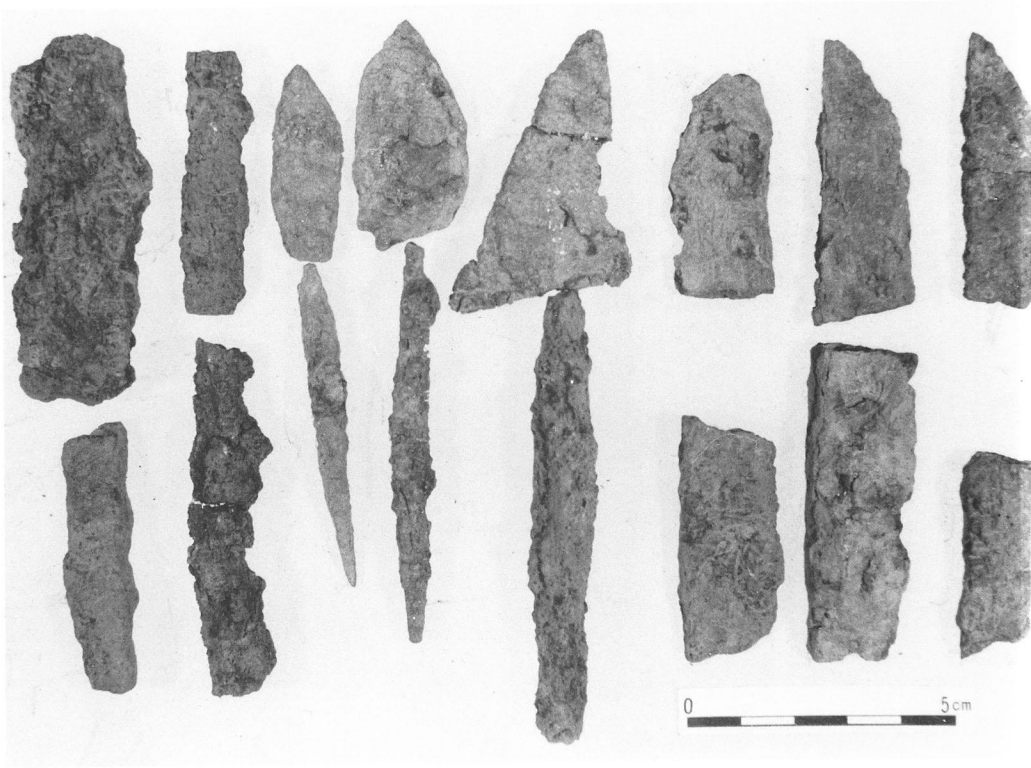


図版　14

1.　出土内耳土器片



2.　出土鉄製品



駒ケ根東部土地改良区下間地区県営ほ場整備事業(昭和59年度分)
埋蔵文化財緊急発掘調査

小山第II遺跡

弓作、弦売の図　(「日本庶民生活史料集成第三十巻」七十一番歌合より抜粋)

1985

長野県教育委員会
駒ケ根市教育委員会

例　　言

本報告書は、昭和59年度に駒ヶ根東部土地改良区下間地区県営ほ場整備事業に先立ち、国庫・県費補助金を得て実施した小山第II遺跡発掘調査報告書である。

1、小山第II遺跡発堀調査の構成

1) 遺跡名　小山第II遺跡

2) 所在地　長野県駒ヶ根市中沢中割4402—3、4403—3

3) 調査原因　下間地区（中沢）県営ほ場整備事業に伴い、当該遺跡が破壊される現状を招いたため、事業に先立ち発掘調査を実施し記録保存を図る。

4) 調査委託者　南信土地改良事業所　所長　関島喜徳郎

5) 調査受託者　駒ヶ根市　市長　竹村健一

6) 調査主体　駒ヶ根市教育委員会及び教育委員会が組織する駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会

7) 調査期間　発掘調査　昭和59年10月15日～昭和59年11月12日
整　　理　昭和59年11月4日～昭和60年3月20日

8) 調査方法　5m×5mのグリット設定による平面発掘

9) 調査面積　1800m²

2、調査整理及び報告書作成業務内容

1) 遺構の実測は、小原晃一、宮沢かつゑが行なった。

2) 写真撮影は、発掘調査に係るものを林茂樹、小原晃一が、整理に係る遺物写真は林茂樹が行なった。

3) 遺物の洗浄は、小町谷杉穂が、注記は田口さなゑが、遺物の復元は林茂樹、小原晃一が、拓本は小原が行なった。

4) 遺物の実測、遺物及び遺構図のトレース、図の作成は、田口さなゑ、小原晃一が行なった。

5) 本報告書の執筆は林茂樹、小原晃一が行なった。

6) 遺物（陶磁器）の鑑定については、瀬戸市歴史民俗資料館々長宮石宗弘氏、同学芸員藤澤良祐氏に御指導を賜った。

3、本報告書の内容

1) 本書は費用・ページ数の都合により、調査によって明らかとなった遺構及び遺物をより多く図示することに重点をおき、文章記述は簡便となった。

2) 遺構・遺物関係の図面の縮尺については、その都度明示してある。

3) 遺物に用いた記号は下記のとおりである。

● 陶磁器　■ 土師質土器　▲ 灰釉陶器　□ 須恵器　△ 鉄製品　㊬ と石　○ 鉄滓片

4) 遺構等の断面層位は、下記のとおりである。

I 層—明褐色土（表土）
I′層—　〃　（攪乱・うね）
II 層—褐色土（耕土）
II′層—　〃　〈ローム粒・木炭多し〉
III 層—暗褐色土
III′層—　〃　〈ローム粒・木炭多し〉
IV 層—暗茶褐色土
IV′層—　〃　〈ローム粒・木炭多し〉
V 層—黒色土
V′層—　〃　〈ローム粒多し〉
VI 層—ローム層
VI′層—ローム漸移層（腐乱土）
VII 層—みそ土
VIII 層—焼土・木炭
VIII′層—灰

目　　次

例　　言
目　　次
第Ⅰ章　発掘調査に至るまでの経過……1
　第１節　保護措置の経過……1
　第２節　調査会の組織……1
　第３節　発掘調査の経過……2
第Ⅱ章　遺跡の環境　……2
　第１節　位置及び地形……2
　第２節　歴史的環境……4
第Ⅲ章　遺構と遺物……12
　第１節　遺構と遺物……12
第Ⅳ章　考察……15

挿図目次

第１図　小山第Ⅱ遺跡位置図及び周辺遺跡分布図……3
第２図　小山第Ⅱ遺跡調査地及び周辺地形図……3
第３図　小山第Ⅱ遺跡遺構全体図……4
第４図　第１号住居跡床面及び遺物出土状態……5
第５図　第１号住居跡実測図……6
第６図　第２号住号跡炭化材出土状態及び実測図……7
第７図　土壙１～３号、小竪穴実測図……8
第８図　掘立柱建物址実測図……9・10
第９図　柱穴群及び溝状遺構実測図……11
第10図　出土遺物実測図……13
第11図　出土鉄製品・石器実測図及び古銭拓影図……14

図版目次

図版１　小山第Ⅱ遺跡遠景、近景、遺構全景
図版２　第１・２号住、小竪穴、土壙１・２号、第１号住居跡、第１号住居跡須恵器・鉄製品・鉄滓片出土状態
図版３　第２号住居跡、カマド、カマド周辺遺物出土状態、灰釉小形碗、床面炭化材、砥石出土状態
図版４　掘立柱建物址、墨書鉢、鉄釉茶碗、鉄製品、古銭出土状態
図版５　小竪穴、土壙１～３号、溝状遺構、柱穴群
図版６　鉄製品、鉄滓、灰釉陶器、土師質土器、須恵器、内耳土器、陶磁器

第Ⅰ章　発掘調査に至るまでの経緯

第1節　保護措置の経過

昭和59年度に南信土地改良事務所が実施する県営ほ場整備事業下間地区(第1換地工区対象面積100,000㎡)施工区内に、小山遺跡があり影響が及ぶため、昭和58年9月6日に県教育委員会文化課小林指導主事、南信土地改良事務所岩崎・丸山両主任、市教育委員会北沢、下村、小原出席のもとに事前保護協議を行った。遺跡地は地形的に下間川に臨む傾斜台地先端部にあることや耕土が薄く土盛工法等が困難な点から、事前に発掘調査を実施し記録保存を行うこととなった。以後、県教委、南信土地改と事業実施について連絡をとり合う中で、調査費用450万円（南信土地改良事務所負担326.2万円、国庫補助金61.9万円、県費補助金18.5万円、市負担金43.4万円)、調査面積1,000㎡以上という事業計画となっな。

事務手続きは、昭和59年1月6日付、文化財関係補助事業計画書提出、4月10日付文化財関係国庫補助事業の内定通知、同日付文化財保護事業県費補助金の内示通知、5月15日付国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出、5月22日付文化財保護事業補助金交付申請書提出、5月29日小山遺跡の保護について(通知)、7月6日付国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定通知、7月18日付文化財保護事業補助金の交付決定通知、8月1日付埋蔵文化財包蔵地小山遺跡の発掘調査について(通知)の手続きを得て、10月15日に駒ヶ根市長と駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会長との間で、「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を取りかわした。

調査は、駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会が行うこととし、小山第Ⅱ遺跡発掘調査団を編成し、団長には林茂樹氏をお願いして、昭和59年10月15日から調査に入った。

第2節　調査会の組織（駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会）

顧　問　鈴木　義昭（駒ヶ根市教育委員長）
会　長　木下　　衛（駒ヶ根市教育長）
理　事　小池　金義（市教育次長）
理　事　友野　良一（駒ヶ根市文化財審議会会長）
〃　松村　義也（市文化財審議会副会長）
〃　林　　赴（　〃　委員）
〃　竹村　　進（　〃　委員）
〃　中山　敬及（　〃　〃　）
〃　下村　幸雄（市立駒ヶ根博物館長）
監　事　宮下　恒男（市収入役）
監　事　北原名田造（駒ヶ根郷土研究会会長）
幹　事　北沢　吉三（市教育委員会社会教育係長）
幹　事　原　　茂（市教育委員会社会教育係）
〃　野々村はるゑ（市立駒ヶ根博物館）
〃　斉藤　香代（市立駒ヶ根博物館）
〃　小原　晃一（　〃　）

・小山第Ⅱ遺跡発掘調査団（事務所　駒ヶ根市上穂南2番15号　市立駒ヶ根博物館内）

団　長　林　　茂樹（日本考古学協会会員）〈発掘担当者〉
調査主任　小原晃一（長野県考古学会会員）
調査員　小町谷　元（上伊那考古学会会員）
指導者　小林　　孚（県教委指導主事）
協力者　小池　幸夫
作業員　宮沢かつゑ、五十川長、下平チカエ、竹村やえ子、井ノ口つもる、宮下錦、松原清子、矢沢さよ子、宮脇ゑみ、北原和枝、吉瀬卯門、吉瀬津江、中村文夫、渋谷吉子、田口さなゑ（順不同、敬称略）

第３節　発掘調査の経過

昭和59年10月15日に、調査予定区域内桑畑の抜根・表土剝ぎ作業を調査期間・費用等の制約から、重機を用いて行う。小山第Ⅰ遺跡の調査終了をもって、当該遺跡の調査を開始したため、本格的な調査は10月27日から行うこととなった。

10月27日に器材移動、テント設営を行い、重機排土後の残土作業にかかる。調査区内、南隅を基点として５ｍ×５ｍのグリットを設定する。残土排土作業中に４－えグリット（Ｇ）Ⅱ層より古銭（寛永通寶）が出土する。２－かＧ、３－えＧ周辺には黒褐色土の落ち込みを確認する。10月29日も続いて、残土排作業を行い、調査区東域に落ち込みが集中していることを確認する。３～６－うＧにかけては溝状に黒色土が堆積している。陶器（近世）の出土が若干見られ、７－うＧからは灰釉印花文皿底部片が出土する。10月30日より残りの排土作業と第１号住居跡、土壙１号、小竪穴、溝状の黒褐色土堆積範囲にそれぞれベルトを設定し掘り下げる。第１号住覆土下層より灰釉碗、土壙１号覆土中層より鉄釉陶器が出土する。調査区地形測量を$\frac{1}{200}$で行い、全域を写真撮影する。調査が進むに従い、溝状の黒褐色土堆積範囲下より土壙、焼土、掘立柱建物１号址が検出されはじめる。11月１日各々の遺構のベルト断面の写真撮影、実測を行う。調査区西域の住居跡状の落ち込みをベルトを設定して掘り下げるが、出土遺物や良好な包含層が検出されない。11月５日第１号住居跡、小竪穴のベルトはずしと第１号住柱穴掘り下げ。柱穴は現状では不規則な配置であり、南壁の東、西隅にカマド状の焼土・木炭・灰の集中箇所がある。７－か・きＧ掘り下げ。５・６－くＧ周辺に住居跡状の落ち込みがあり、ベルトを設定して掘り下げる。第２号住居跡とする。11月６日第１号住居跡床面中央には焼けた部分、木炭集中部分、焼土集中部分が顕著で、柱穴の配置やカマドの形状などから考えると特異な住居跡の形態を示す。第２号住は北壁で70～80㎝と深く、西壁南寄りにカマドが遺存するが、東、南壁にはみそ土の露出があり攪乱している。第１号住外、写真撮影を行う。11月７日第１号住プラン、出土遺物の平板測量。柱穴群掘り下げ。土壙２・３号を$\frac{1}{2}$掘り下げる。第２号住ベルト断面実測・写真撮影・取りはずしを行う。11月８日引き続いて第２号住の掘り下げを行い、第１号住、土壙１～３号、小竪穴、柱穴群・溝状遺構（６・７－か・きＧ内）の平板測量と写真撮影を行う。第１号住カマド$\frac{1}{2}$掘り下げと柱穴群を掘り下げる。11月９日第１号住カマド断面実測と掘り下げ。土壙２・３号のレベル実測と柱穴群・溝状遺構出土遺物レベル実測と取り上げ作業、さらに第２号住プラン平板実測を行う。第２号住床面には炭化材が集中して遺存している。炭化した柱がそのまま残っている柱穴がある。11月10日第１号住カマド$\frac{1}{2}$掘り下げ。写真撮影を行い、プラン・出土遺物の平板測量、レベル実測を行う。第２号住のプラン、出土遺物の写真撮影とレベル・平板測量を行う。柱穴群・溝状遺構のプラン平板測量。11月12日第２号住居跡カマド精査を行い、断面実測、写真撮影、掘り下げを行う。調査区域清掃、全体の写真撮影を行い、本日にて発掘調査を終了し、器材整理、撤収を行う。

晩秋で、朝は霜が降り立ち、夕方には寒風が吹くという状態の中で、発掘調査に参加して下さった地元の作業員の方々をはじめ、東部土地改良区・南信土地改良事務所・工事請負者等の多くの方々の御協力により、無事調査を終了できたことに対して、心から感謝しながら調査を終った。　（小原　晃一）

第Ⅱ章　遺跡の環境

第１節　位置及び地形

当遺跡は、駒ヶ根市中沢中割4402－３、4403－３番地に所在する。標高は665ｍ前後である。

中沢地区は伊那山地の主峰戸倉山麓に源を発する新宮川とその支流である百々目木川、陣馬形山より流

第１図　小山第II遺跡位置図及び周辺遺跡分布図(Ｓ＝1/25,000)

れ出る下間川により造り出された扇状地上にある。当遺跡はこの下間川の左岸段丘上に位置し、比高差は20ｍを測る。北は下間川に面し、西と東は段丘が続き、南には、陣馬形山末端の山麓を控え、山麓寄りには涌水による湿地帯が分布している。

地質基盤は、礫層からなりその上にローム層が入り込んだ砂礫層、さらに新期ローム層が堆積した地層からなる。当遺跡の層位は、例言に示したとおりであり、開墾時や耕作時の土層の移動により攪乱が多く見られる。また特に、調査区北側にはみそ土の堆積層があり、北東の小高い丘（標高701ｍ）の斜面にもみそ土の露出があり、下間川へかけて続くものと考えられる。

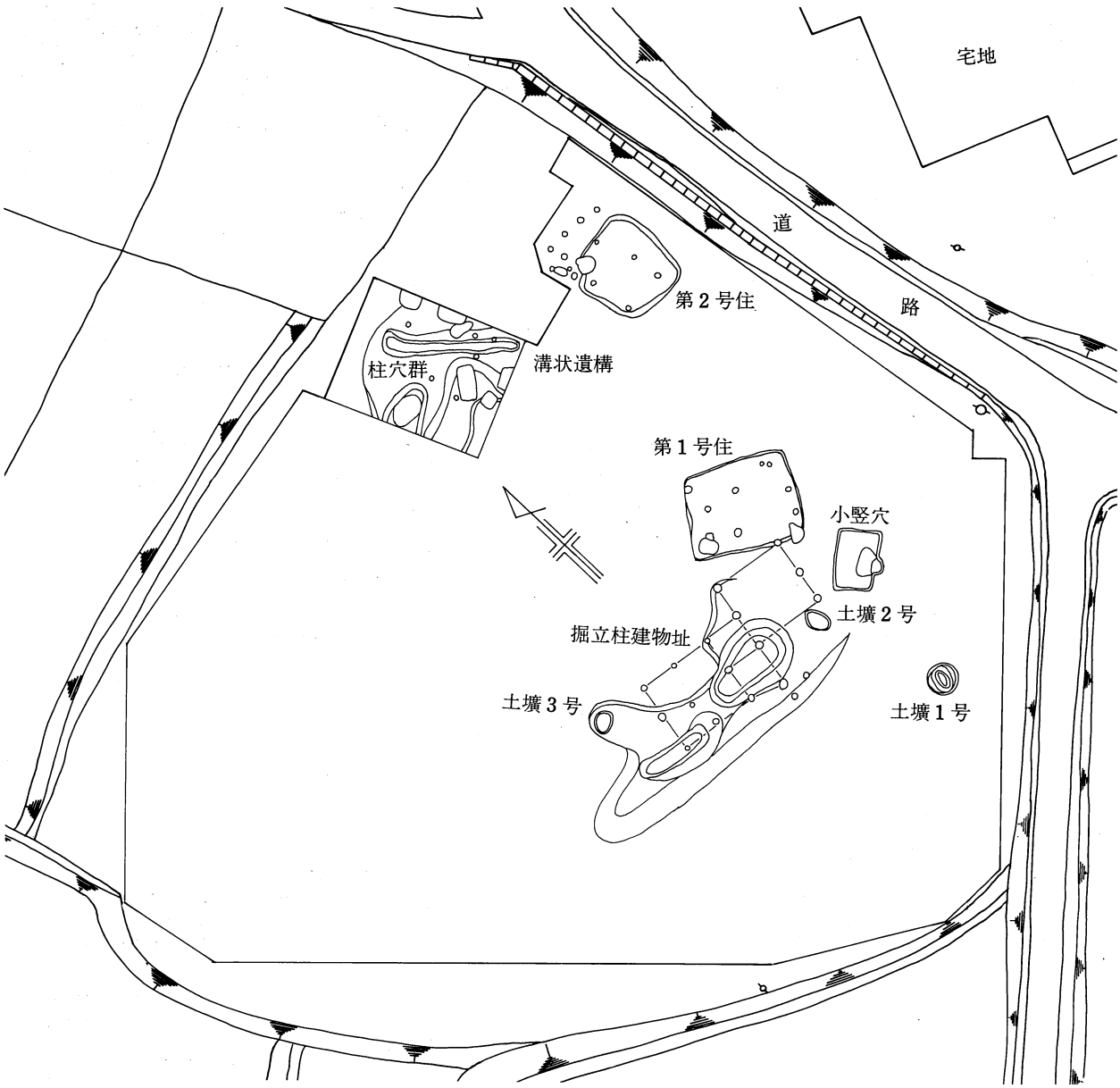
（小原　晃一）

第２図　小山第II遺跡調査地及び周辺地形図(Ｓ＝1/2,000)

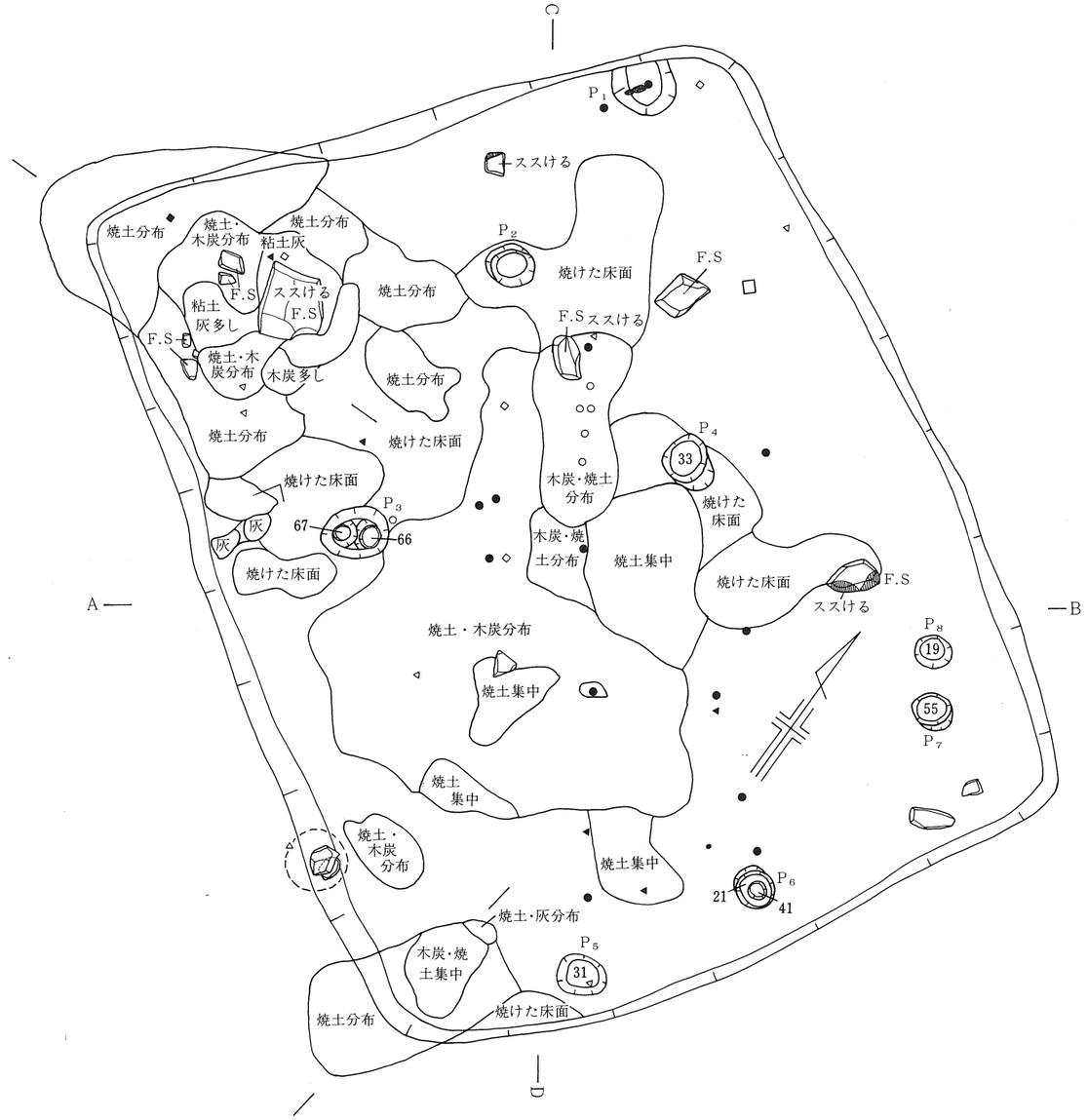
第２節　歴史的環境

新宮川と下間川により形成された扇状地及び河岸段丘上には数多くの遺跡、城跡の存在が確認されている。第１図●は小山第Ⅱ遺跡、１は小山第Ⅰ（縄文、中世）、２は羽前場（縄文・弥生）、３は門前（縄文）、４は的場（縄文・中世）、５は高見城跡（中世）、６は下間（縄文・平安・中世）、７は高見原（縄文）、８は横山Ａ（縄文）、９は菅沼（平安）、10は梨ノ木平（縄文・平安）、11は古城跡（中世）、12は菅沼城跡（中世）、13は大楽寺跡（中世）、14は東原（縄文）、15は久保垣外（縄文）、16は徳光地（中世）、17は小林（縄文）、18は五郎垣外（縄文）、19は太座垣外（縄文）、20は上垣外（縄文）、21は細久保（縄文・平安）である。これらの遺跡の中で、当該遺跡の性格（平安・中世）と関連をもつと考えられるものは、１の小山Ⅰ、６の下間、９の菅沼、10の梨ノ木平の各遺跡である。１を除き発掘調査は行なわれていないが、表採等の資料により灰釉陶器を得ている点や下間川を挟んで段丘先端部に占地している点など類似性が多い。又、中世の遺跡や城跡の分布も多く、城跡を拠点としての領域の設定や、生産基盤・生活形態等を考慮する上での環境は特に注目され、文献史料等の記録や考古学的調査との関係は今後益々密接となるものである。

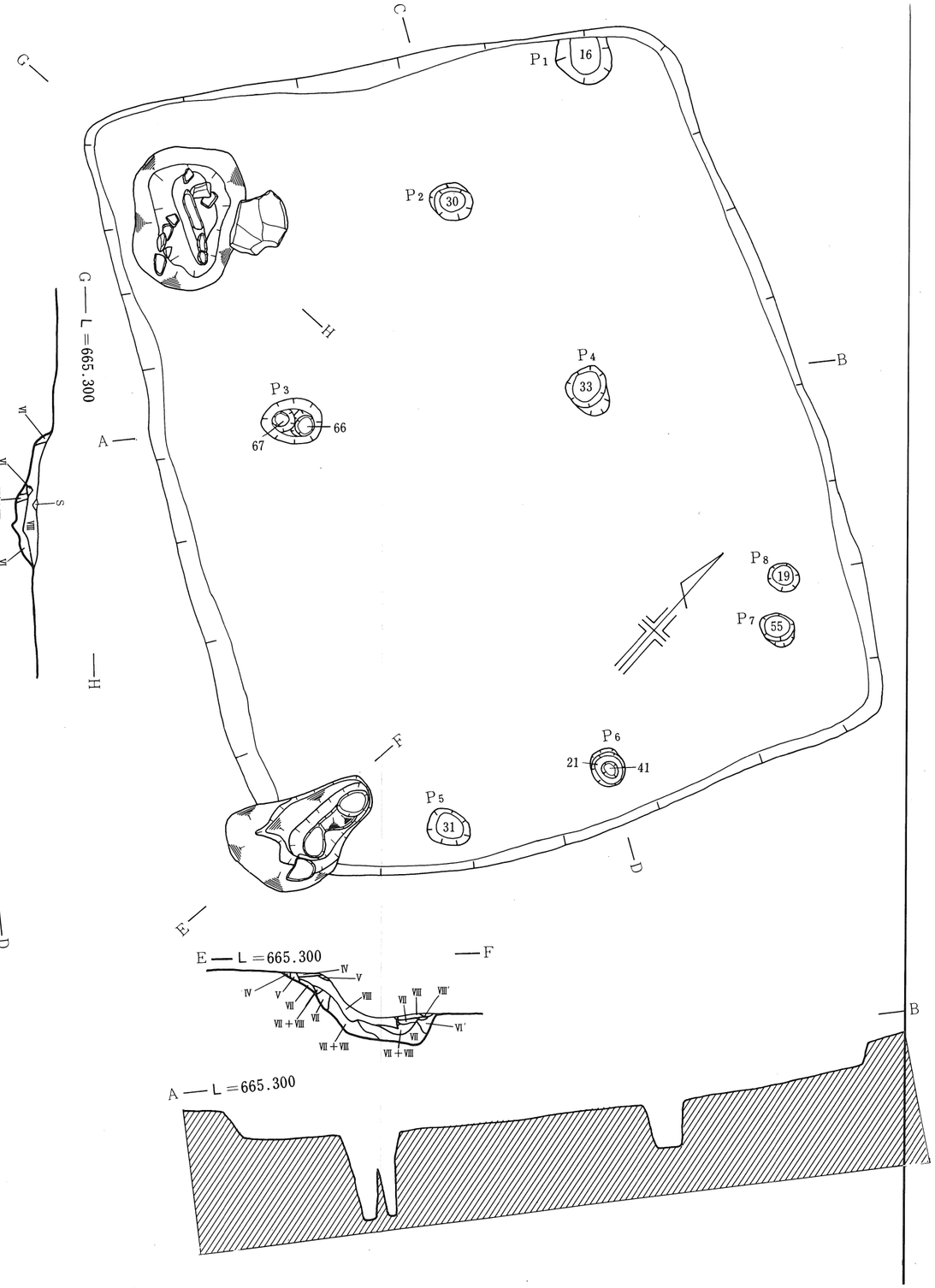
（小原　晃一）



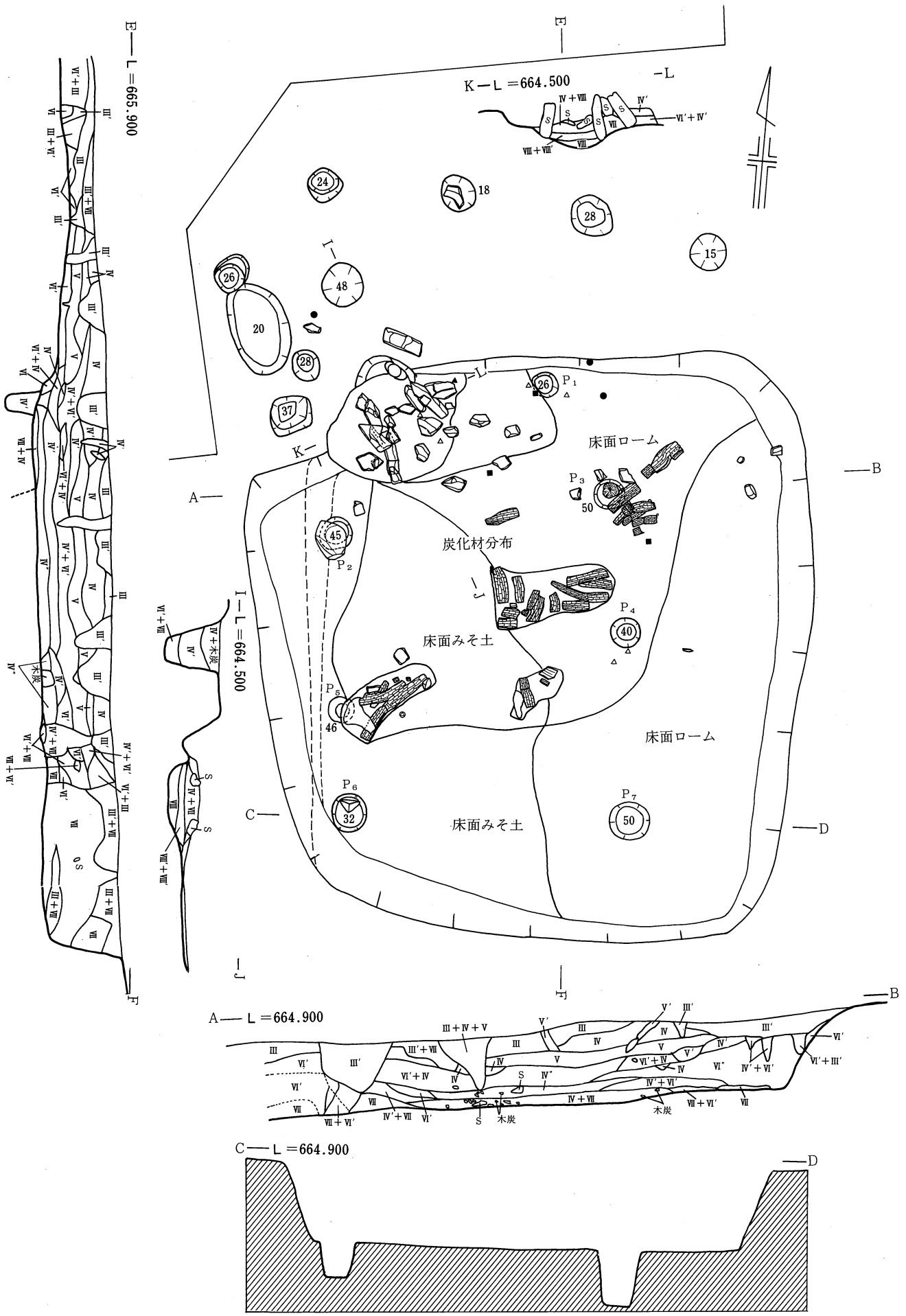
第３図　小山第Ⅱ遺跡遺構全体図（Ｓ＝1/400）



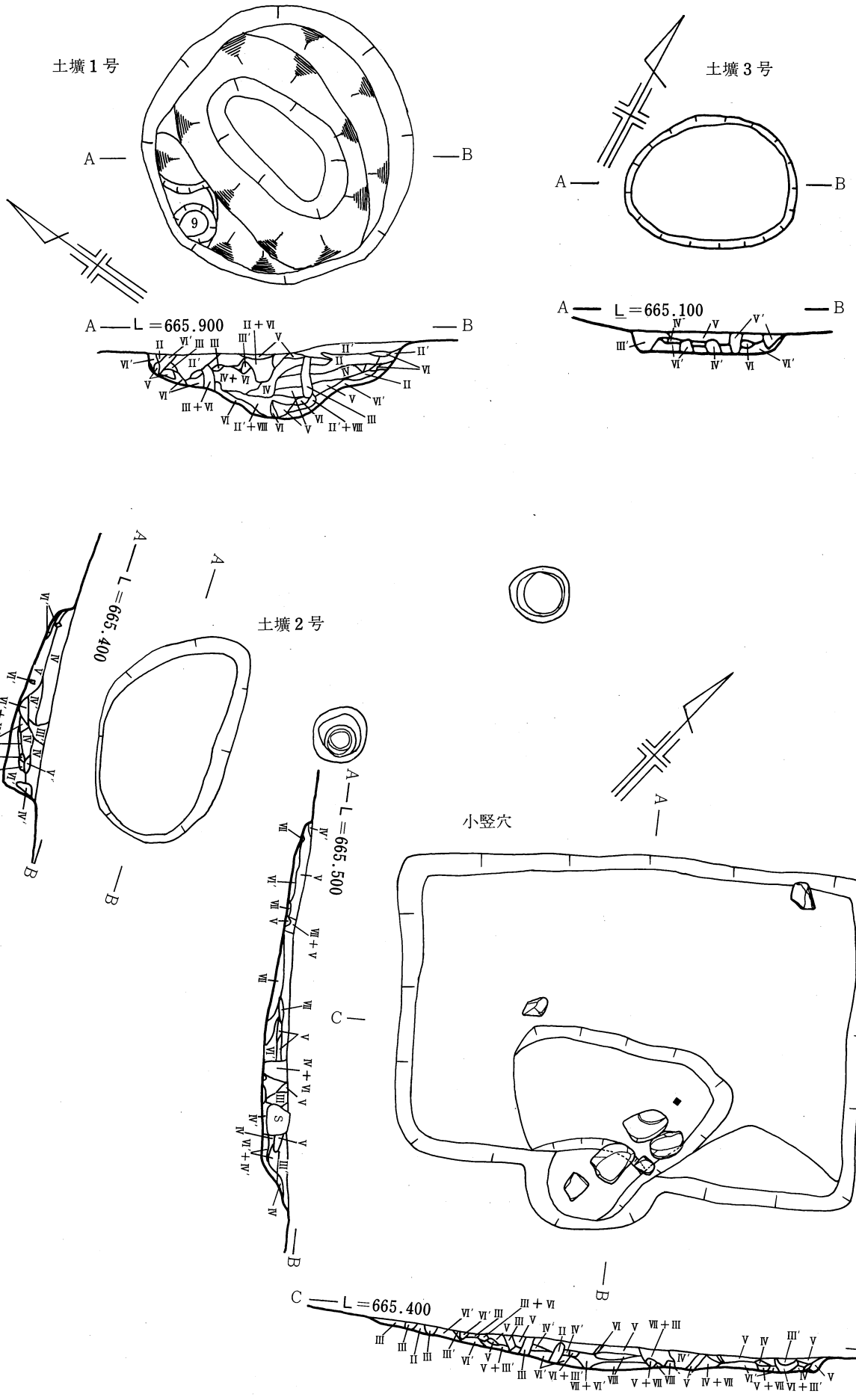
第 4 図　第Ⅰ号住居跡床面及び遺物出土状態（S＝1/40）



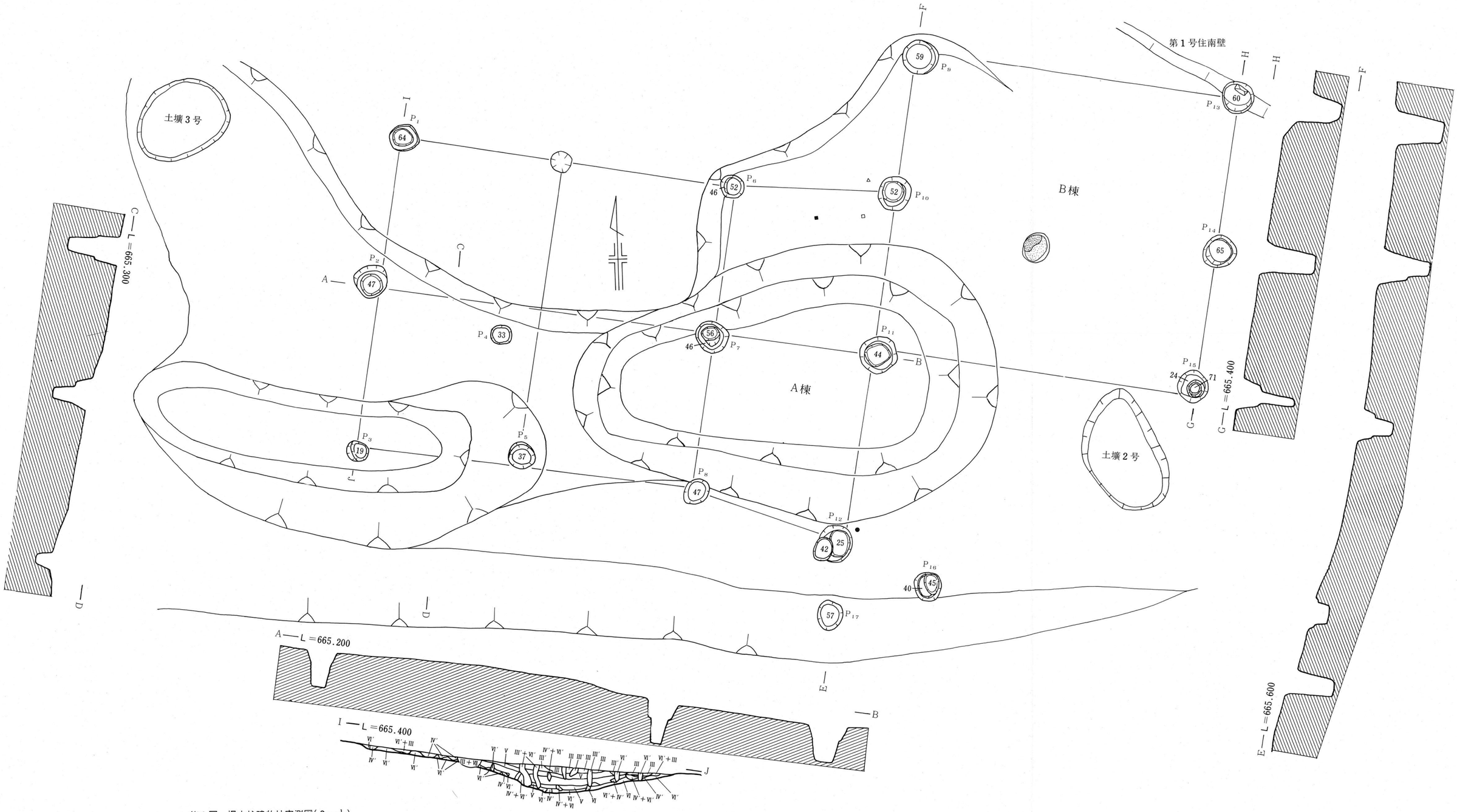
第 5 図　第Ⅰ号住跡実測図（S＝1/40）



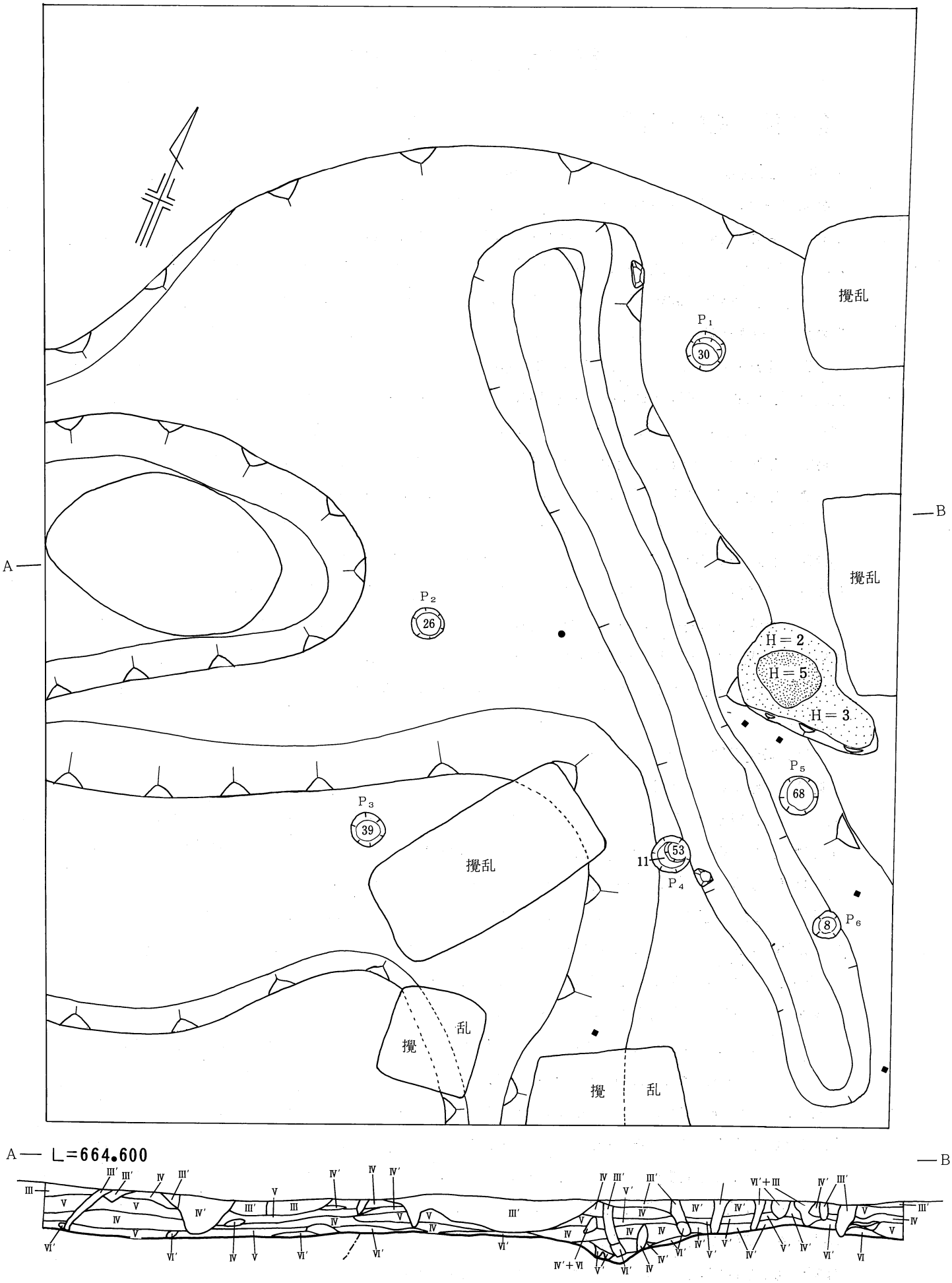
第 6 図　第2号住居跡炭化物出土状態及び実測図(S ＝$\frac{1}{40}$)



第7図　土壙1～3号、小竪穴実測図（S＝$\frac{1}{40}$）



第8図　掘立柱建物址実測図（S＝$\frac{1}{40}$）



第９図　柱穴群及び溝状遺構実測図（Ｓ＝$\frac{1}{40}$）

第Ⅲ章　遺構と遺物

第１節　遺構と遺物

１．第１号住居跡（第４・５・10・11図、図版２）

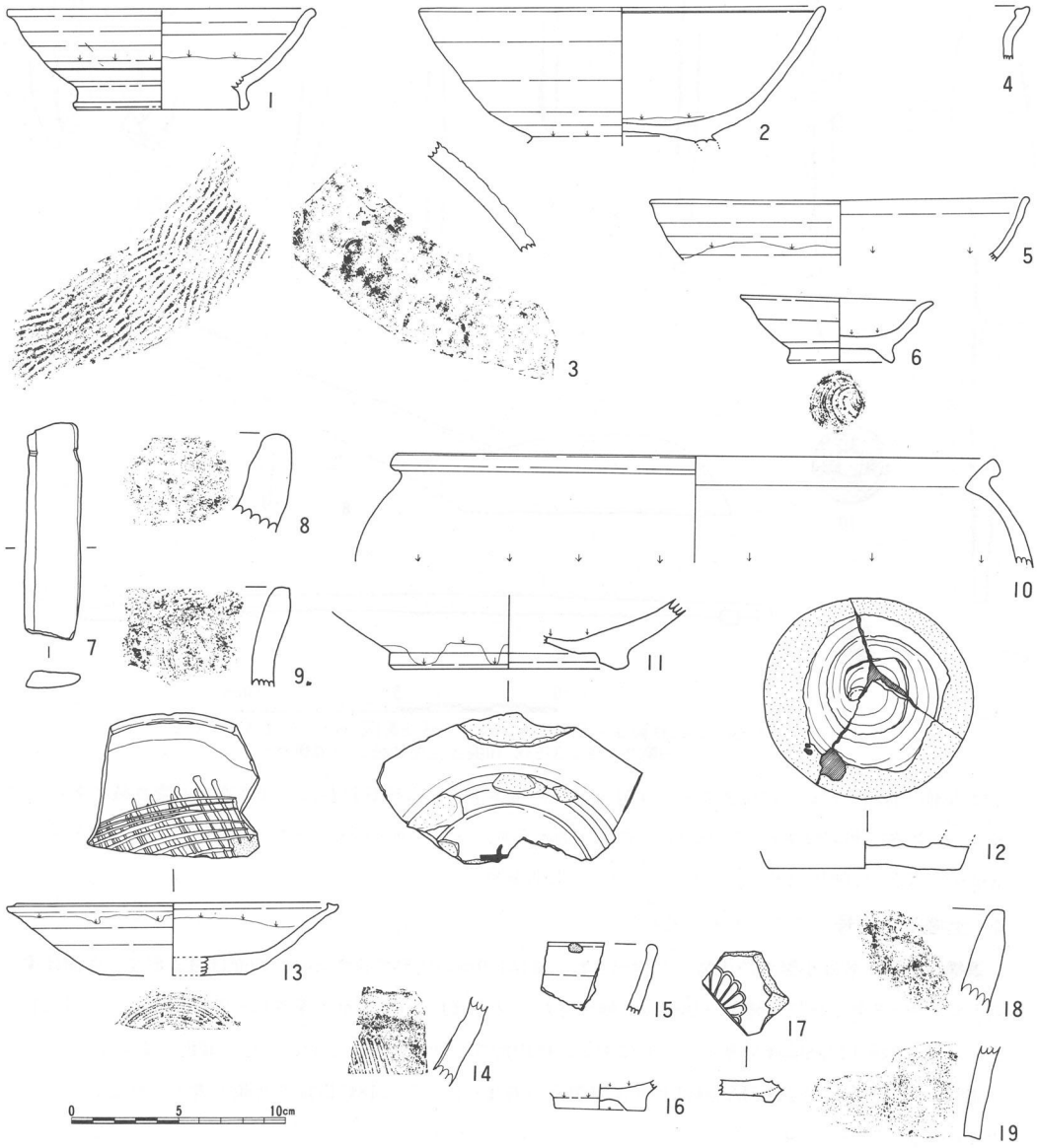
遺構　本跡は調査区の東域より検出された隅丸長方形の竪穴住居跡である。プランは長軸６ｍ15cm、短軸５ｍで、主軸は北西を指す。掘り込みは西壁・南壁で15cm前後と浅くゆるやかで、東壁・北壁で25～30cmと深い。「カマド」は南西壁隅と南東壁隅の２ケ所を調査時に判断したが、両方ともに袖石、天井石等のカマド構造を示す遺物の遺存はなかった。床面は割合堅く、平坦である。床面中央から壁にかけて焼土・木炭の集中・分布が見られ、また、床面も焼けた箇所が多い。柱穴は８本検出され、配列は規則性に欠くが、P_2～P_7が主柱穴と考えられ、深さは30～66cmを測る。P_3は２本の深い柱穴により構成される。床面西隅には40×50cmの煤けた盤状石（花崗閃緑岩）が置かれ、北壁寄りには煤けた花崗岩、花崗閃緑岩、変輝緑岩（クロガネ石）が４個遺存していた。なお床面中央より鉄滓片（鍛鉄か）が多く出土している。

遺物　南西カマド周辺及び床面中央の床直上より出土している。第10図１は灰釉碗$\frac{1}{4}$個体で、付高台である。高台は内彎ぎみで指ナデで接合し、胴央部はヘラ削り、口縁部は横ナデ調整をしている。立ち上りはややきつく、口唇部はやや外反する。灰緑色釉で、内面全体と外面胴下部まで漬け掛けしている。２は灰釉深碗$\frac{1}{5}$個体で付高台をもつ。立ち上りは胴下部で肥厚しやや内彎ぎみに口唇部まで直線的に立ち上る。内外面横ナデ調整であるが、口唇部内面は若干ヘラナデ。釉は灰緑色釉が内外面胴下部まで漬け掛けされていたものが焼成時の高温のためかただれている。１・２はともに白瓷Ｋ14期に位置付けられる。３は須恵器甕胴部で外面平行叩き目、内面は青海波が見られる。炭化物が内外に付着。美濃須恵に位置付けられよう。４は黒色の鉄釉がかかった香炉かと思われ、18世紀以降に位置付けられる。第11図中２・４は鉄鏃の茎部である。

２．第２号住居跡（第６・10・11図、図版３）

遺構　本跡は第１号住居跡の北東、調査区の隅より検出された隅丸方形の竪穴住居跡である。プランは長軸４ｍ90cm、短軸４ｍ20cmで、主軸はほぼ北を指す。掘り込みは西壁で25cm前後、南・北・東壁で65～70cmを測る。東・南両壁は耕作時に攪乱を受け、特に南壁は不明瞭である。カマドは北西壁隅に設けられ袖石は良好に遺存している。床面北壁側半分に炭化材が分布している。床面は東半分はローム層で堅く、西半分はみそ土が基盤で柔らかい。柱穴はP_1～P_7があり１を除きほぼ対応するが全体的に西に寄っている。深さは26～50cmを測り、45cm前後が平均である。北壁外の８ケ所のピットは深さ15～48cmと不揃いであるが屋外施設（張り出し部等）とも考えられる。なおP_3の柱穴には炭化材がそのまま遺存している。

遺物　カマド周辺及び床面北側の覆土中層から下層にかけて出土している。第10図５は灰釉碗で口縁が広く深さは浅くなるものと考えられる。口唇部は内彎ぎみに立ち、やや外反する。灰緑色釉を胴下部まで漬け掛けしている。炭化物付着。６は灰釉小形碗でほぼ完形である。口径９cm、高さ2.8cm～3.2cm、底径4.8cm。やや高い付高台をもち、胴上部でくびれて外反する口縁部に至る立ち上りを見せる。底部は糸切り。胎土に粗い長石粒を含む。釉は内面にのみ灰緑色釉がかかる。５・６はともに、白瓷Ｋ90期東濃産に位置付けられる。７は砂岩製の砥石で、片側に紐吊し等の為の抉入がある。第11図１・６・７・９の鉄製品の内、１・９は鉄鏃、６は棒状鉄製品、７は鏃の再製作用の塊である。１は平根形鉄鏃でほぼ完形で長さ19cmを測る。茎部に鐔が付く。茎部断面はほぼ方形をなす。９は先端部を欠き、現長は21.5cmで、茎部断面は隅が丸味を帯びる。なお、カマド覆土より灰釉陶器を抱き込んだ海綿状鉄滓が出土。

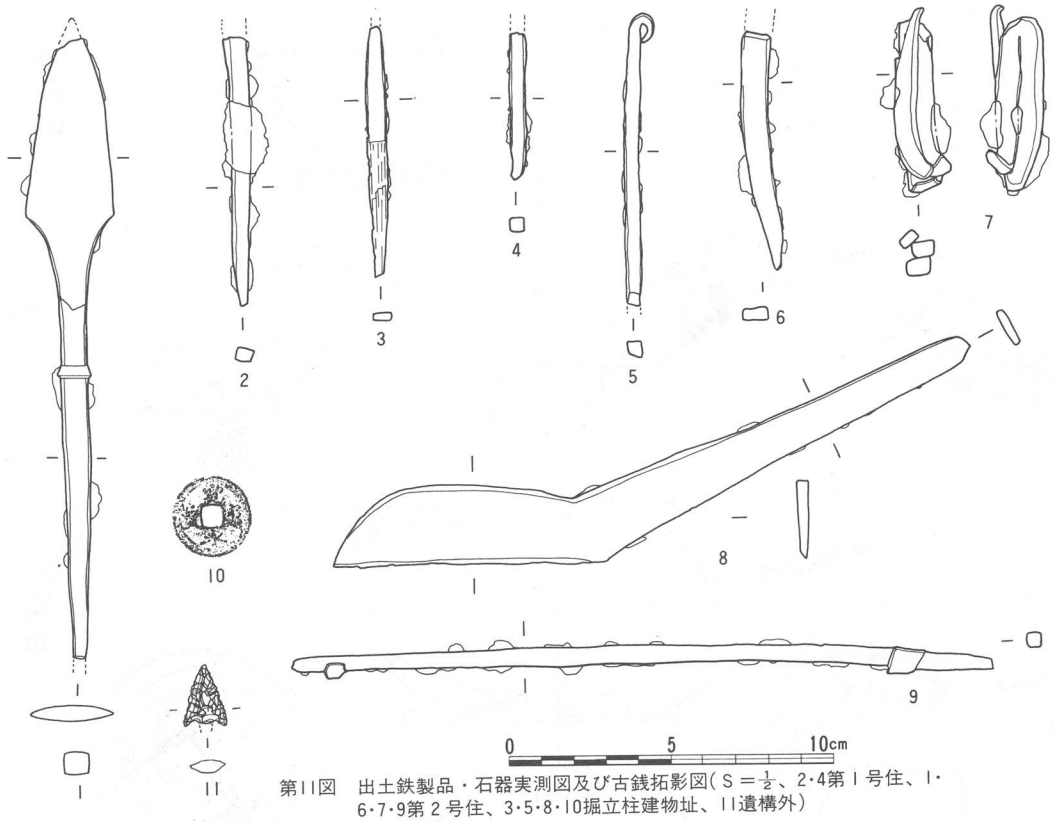


第10図　出土遺物実測図（S＝$\frac{1}{3}$、1～4第1号住、5～7第2号住、
8小竪穴、9溝状遺構、10～12掘立柱建物址、13～19遺構外）

3．掘立柱建物1号址（第8・10・11図、図版4、6）

遺構　東西棟の3間×2間の総柱式建物1棟（A棟）の東側に2間×1間の平地式建物（B棟）が付設されたプランである。A棟は桁行（P_1～P_{11}）6.2m、梁行（P_1～P_3）4.5mを測り、柱穴は径40cm深さ45cmを測る断面形有段U字形を呈する掘り方で計12箇で長方形に構成される。B棟は、A棟東北隅の柱穴P_{10}・P_{11}を共用し、桁行4m、梁行3.8mを測る。A棟と同じ形状の柱穴6箇で方形プランを構成する。屋根は共に切妻造が推定され、A棟は倉庫、B棟は生活区と思われる。B棟の床面は軟かで、中心部に径50cm内外の焼土塊があり、転し床の中心部の地床炉が推定される。

遺物　柱穴上部の黒色土層から第10図10、11、12が出土。他は柱穴上端面から出土した。第10図10は折縁の甕で灰白色釉がかかる。11はこね鉢底部で、高台内は磨りその上に墨書がある。淡黄灰色釉。12は古瀬戸灰釉瓶子底部で、内面はヘラかきをしている。破損後、漆で接合補強をしている。10・11は18C以降、



第11図　出土鉄製品・石器実測図及び古銭拓影図（S＝½、2・4第1号住、1・6・7・9第2号住、3・5・8・10掘立柱建物址、11遺構外）

12は古瀬戸前期（13C）に位置する。第11図3は鉄鏃茎部、5は棒状鉄製品、10は寛永通寶鉄銭である。8は「くの字」形の鉄製品で、長さ21.5cm、刃部8.5cm、茎部13cmを測る。刃部は片刃で40°の角度をもち、背は平らで、「弓削り用刃子」と考えられる。（表紙参照）

4．土壙1～3号（第7・10図、図版5）

遺構　土壙1号は小竪穴の南域より検出され、直径1.9mの円形で深さ45cm。断面は舟底形で、底面は柔らかい。2・3号は掘立柱建物址周辺より検出され、2号は1.5m×1mで深さ15～25cmを測り、3号は1.2m×1mで深さ15cm前後を測る。ともに平面は楕円形で、断面はタライ形をなし、底面は柔らかい。

遺物　土壙1号のみ鉄釉碗口縁部片が1点覆土中層より出土し、18C以降の所産と考えられる。

5．小竪穴（第7・10図、図版5）

遺構　本跡は第1号住南側より検出され、長軸3.3m、短軸2.4mの隅丸長方形をなし、東壁寄りに半円形に張り出したピットをもつ。深さは最深部で15cmと浅く床面は柔らかい。花崗岩、花崗閃緑岩の自然石が5個遺存している。ピット等は検出されなかった。

遺物　第10図8の土師質土器が1点床面より出土しているが、器壁は分厚く器形は不明である。

6．溝状遺構・柱穴群（第9・10図、図版5）

遺構　調査区北域より検出され、溝状遺構は幅1.3m、長さ7.5m、深さ20cmで、北壁は2段となる。柱穴群は溝状遺構を挟んで計6本が検出され深さは8～68cmと不揃いである。溝状遺構北壁には1m×0.7mの範囲に焼土が5cm前後遺存している。第10図9の土師質土器ほか数点と近世陶器が出土している。

遺構外出土遺物（第10図、図版6）　掘立柱建物址の南・西域の耕土下より出土している。第10図13は卸皿で二重口縁をもつ。口唇部の釉は発色せず、地は淡黄色。糸切り底。14は鉄釉擂鉢で内外とも茶褐色釉。15は褐色斑をもつ鉄釉香炉。16は黒褐色釉の鉄釉茶碗底部で高台に印がある。17は灰釉印花文皿底部。淡緑色釉。18・19は土師質土器片。13は古瀬戸後期（15C前半）、17は16C前半、その外は17C以降に位置付けられる。

（林茂樹・小原晃一）

第Ⅳ章　考　　察

第Ⅱ遺跡は、第Ⅰ遺跡の西北、200ｍに位置し、下間川に臨み岬状に突出する段丘上にあって正に中世地名の「ごみがいと」の表音通りの地形である。発掘面積1200㎡内の結果は、平安時代の竪穴住居址２軒と小竪穴１基、鎌倉時代の掘立柱建物１軒、時期不明の土壙３基、溝状遺構及び柱穴群各１が検出された。まず**竪穴住居址**であるが、１号址は柱穴配置が不規則で床面に焼土炭化粉末が多く、鉄滓や鍛鉄片が出土し、中には灰釉陶片を含んだ鉄滓などがあり、製鉄関係の工房と思われる節があるが製鉄関係用具等積極的な資料は出土していない。２号址は１号址と同じく長方形プランの６柱穴で北壁にカマドを持つ。火災で消失した家屋であるが、北壁外のカマド部分を囲んで８箇の柱穴が設けられ廂状の施設が設けられていて他に類を見ない。共に出土白瓷陶から見て、１号址は10世紀後半、２号址は11世紀前半の時期のものと認められる。箕輪町中道遺跡の第Ⅲ期[註12・13]、塩尻市吉田向井遺跡の第Ⅲ期に比定できる。共に平地における集落の最も繁栄した時期であるが、また山間地に進出する時期でその例としての好例である。中沢地区としては最も早く下間川下流から白瓷陶の文化が上流に向って進出する傾向を示している。10世紀以後、小さな湿地帯や山麓の湧水地を求めて水稲耕作が進む状況を物語っていて、13世紀以後の武士の根拠地としての基盤即ち農業の生産的条件の発展を予告しているのである。

掘立柱建物第１号址は、東西棟の総柱式３間×２間の建物と平地式２間×１間の建物が連接して１軒を構成し、古瀬戸灰釉瓶子、同卸皿、弓削用刀子、鉄鏃等を伴出した。近世遺物が若干あるが柱穴面上層の黒色腐植層に包含されていた。第11図８の弓削り用刀子は室町末期作の「七十一番歌合」の「弓作」師の図に画かれた工具（表紙挿図）と同一のものと思われこの点、新知見の中世用具であろう。これらの事から十三世紀末もしくは十四世紀前半の弓作技術者の住宅と工房と思われ、居館址外に位置した例として飯島町南羽場遺跡[註14]があり第１遺跡の居館址と関係を持つと考えられる。（林　茂樹）

関係文献（第１遺跡・第Ⅱ遺跡共通）

註１　鬼頭清明　「古代の村」古代日本を発掘する－６、岩波書店、1985

２　小松茂美、他「法然上人絵巻上中下」続日本絵巻大成１・２・３　中央公論社

３　小松茂美、他「一遍上人絵伝」日本絵巻大成　別巻　中央公論社　1978

４　西ヶ谷恭弘　「今川氏館の発掘―駿府城二の丸の地下遺構―」　歴史と人物第144号　中央公論社1984

５　木村竹次郎　「朝倉氏館跡の発掘」歴史手帖　1977―５巻第４号

６　小松茂美、他「蒙古襲来絵詞」日本絵巻大成14　中央公論社　1978

７　小松茂美、他「粉河寺縁起」日本絵巻大成５　中央公論社　1977

８　藤沢良祐　「長野県出土の古瀬戸について ―蔵骨器を中心として―」信濃第31巻11号

９　西ヶ谷恭弘　「中世・戦国の築城変遷」探訪の日本の城・別巻築城の歴史　小学館　1978

10　「上伊那誌人物篇」には「高見重清」を応永年代中沢在住の武士として「伊那武鑑根元記」を引用し木曽義昌家士と記載している。

11　倉田文和「地頭中沢氏における惣領制の成立と展開」駒ヶ根市史編纂紀要　駒ヶ根市教委　1983

12　伴　信夫、他「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(上伊那郡箕輪町)」長野県教委。日本道路公団

13　小林康男、他「吉田向井発掘調査報告書」塩尻市教育委員会　1983

14　林　茂樹　「発掘された中世遺構―南羽場遺跡―」歴史手帖 ４巻12号－1976

市民のみなさんへ ——「まとめ」に代えて——

竜東地区の県営圃場整備事業下間工区の改田工事により、中沢地区中割区羽前場地籍にある小山遺跡が破壊される事になったので、工事前に、学術的調査を行なって記録として保存し後世に伝えることに決まり、昭和59年9月から12月にかけて3ヶ月間の考古学的発掘調査が実施されました。

中沢地区としては初めて大規模な発掘が行われ、その結果、事前には全く予想もしなかった歴史時代の大遺跡が、数百年前の姿を現してきました。その大体を次にまとめてみましょう。

第Ⅰ遺跡（まやのしり地籍） 今から600年ほど前の室町時代の豪族の館（やかた）跡とその下層に縄文時代中期（4000年前）の遺跡が重っており、その広さはおよそ5000平方ｍもあり、このうち約1000平方ｍが詳しく調査された結果わかってきたことは、十五世紀の初めごろここに恐らく中沢郷一帯を支配して、産業の開発の中心になっていた地蔵職（ぢとうしき）が構えた屋敷があったことです。

その屋敷（館）は1辺60ｍの土塁（土塀）でほぼ方形に囲み、その中の敷地4900平方ｍの広さには、池を中心に、太い掘立柱で造られた切妻造りや、寄棟造りの家が十数軒も建ち並び、馬を並べる広場もあり、土塀の1部には大きな礎石の上に太い柱を建てた門（木戸）やその外側には、見張りをするための櫓（やぐら）も立てられていたようです。当時貴重な舶来品であった青磁や、国内産でも貴い古瀬戸の壺などたくさん持っていました。中世の竜東のようすはまだよくわかっていません。鎌倉・室町の文書、石碑の文字などから、諏訪神社系の武士「中沢氏」が400年間も地頭として住んでいたと言われており、中世の信州の名族とされていますが、詳しいことは謎に包まれていますがこの居館址の発見は謎を解く鍵となり、少くとも、館のようすや、時代からみて「中沢氏」の遺跡と断定しても間違いないと思われます。

第Ⅱ遺跡（ごみがいと地籍） 今から900年ほど前の平安時代竪穴式の家2軒と700年ほど前の鎌倉時代の掘立柱の家1軒が発見されました。平安時代の家は、家の中に大きなカマドが造りつけられ、鉄くずなどが多く、特別な仕事が行われていたと思われます。日本の三大遺跡の一つと言われる塩尻市平出遺跡の復元家屋と同じ時期のもので中沢地区では初めて完全な姿を現した訳です。

掘立柱の建物は、2棟続きで東西方向の長棟の大きな家ですが、鎌倉時代の弓造りの職人の住宅と工房であったようです。第1遺跡の館跡と関係がある遺跡と考えられます。

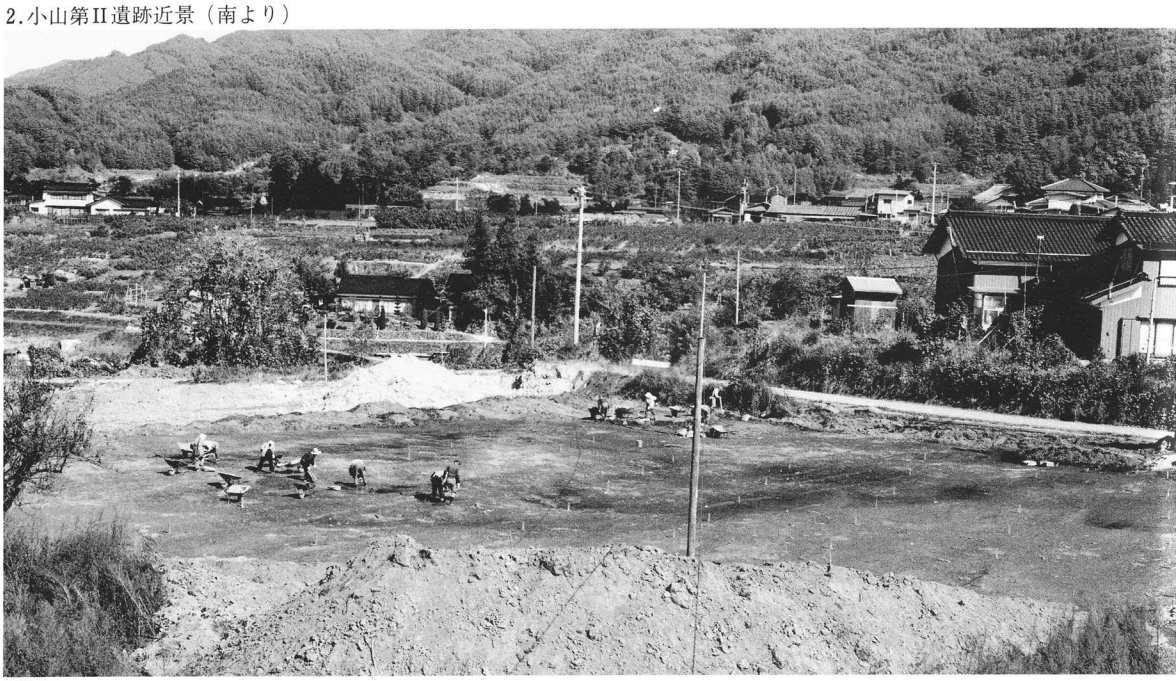
第Ⅱ遺跡は記録保存できましたが、第Ⅰ遺跡は、県内では珍らしい発見であり、市内の歴史研究にとっても、全国的に見ても誠に学術上の価値が高くそのうえ遺跡が大き過ぎ三分の一ほどしか調査できなかったので、工事で破壊しないように設計を変更し、新しい水田の下に完全に埋めて保存し将来に備えることに決まりました。今後は市政の中で文化財保護面を担当する教育委員会や文化財審議委員会の積極的な保護策に委ねることになりました。これも駒ヶ根市として初めての遺跡保存策であり、教育百年の大計の仕事として特筆されるべきことであり、今後の保存、活用について市民の皆様の御協力をお願いします。

このように遺跡の永久保存は幾多の困難をのり越えて実現されました。これについて御協力頂いた県の南信土地改良事務所長さん始め係の方々、東部土地改良組合の役員、係の方々、市教育委員会教育長さんや次長さん始め担当の方々、土地所有者宮下理一氏始め多くの方々、工事請負丸福久保田組等に対し深い敬意と謝意を表する次第です。また、本遺跡の出土遺物、特に中世の陶器について実見の上、詳しく御教示を戴いた瀬戸市歴史民俗資料館長宮石宗弘氏、同学芸員藤沢良祐氏、並びに農繁期にも拘らず発掘に参加して頂いた多くの作業員の方々に厚く御礼申しあげる次第です。

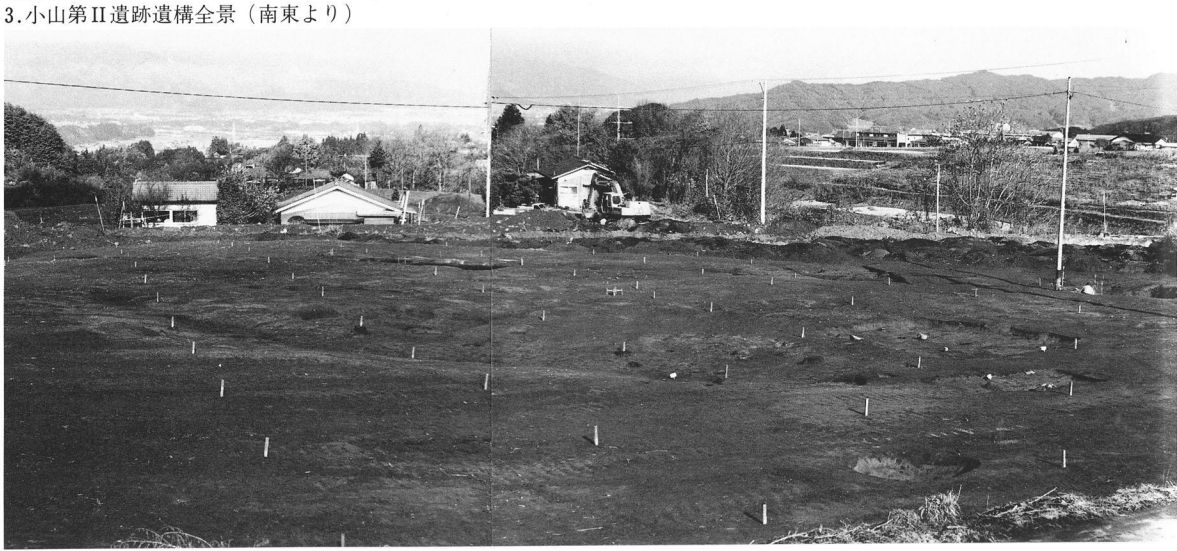
（調査団長　林　茂樹）

1.小山第II遺跡遠景（南より）

2.小山第II遺跡近景（南より）



3.小山第II遺跡遺構全景（南東より）

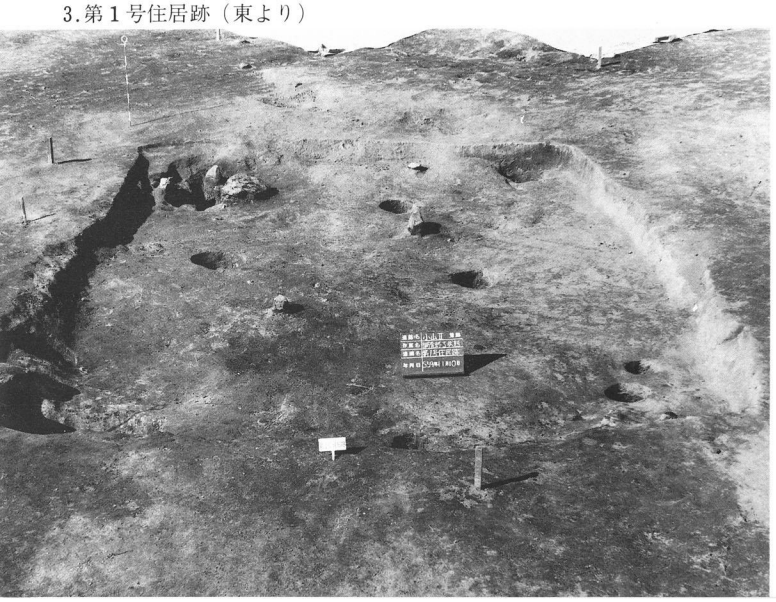


図版 2

1.第１・２号住、小竪穴、土壙１・２号（南より）

2.第１号住居跡（北より）

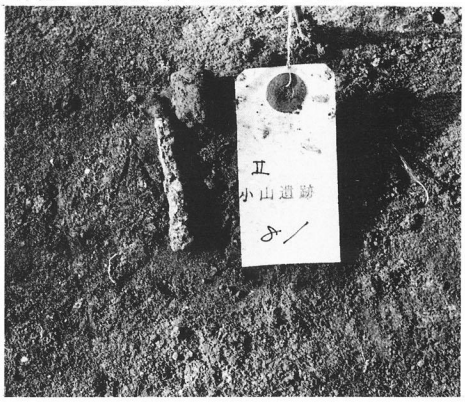
3.第１号住居跡（東より）



4.第１号住居跡須恵器出土状態

5.同　上

6.同上　鉄製品（鉄鏃茎）出土状態



7.同上　鉄滓片出土状態

1.第２号住居跡（東より）

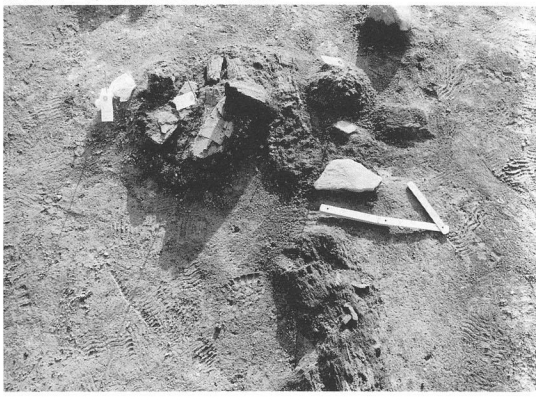
3.第２号住居跡カマド

2.第２号住居跡（西より）

4.同上　灰釉小形碗出土状態

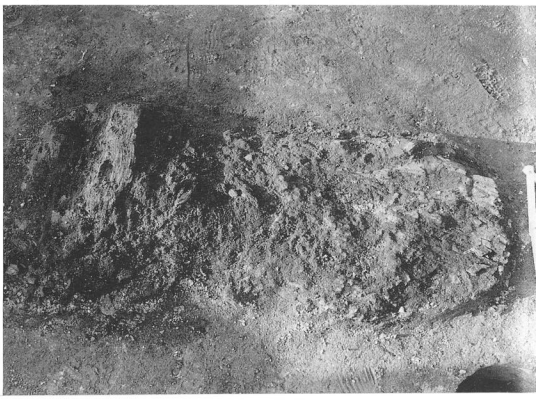
5.同上　カマド周辺遺物出土状態

6.同上　床面炭化材出土状態



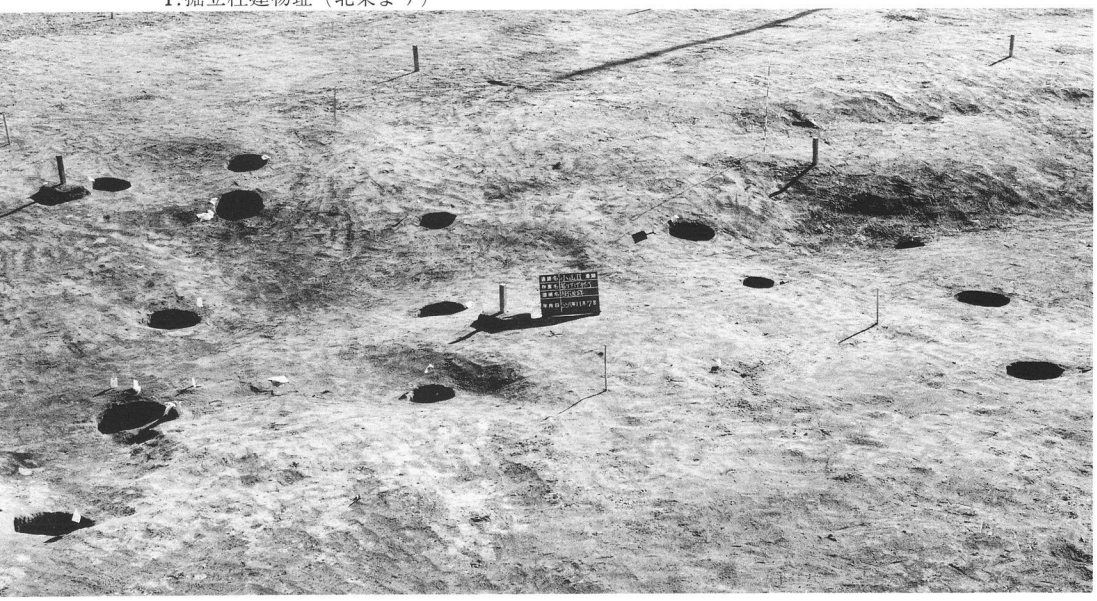
7.同上　床面炭化材及び砥石出土状態

8.同　上

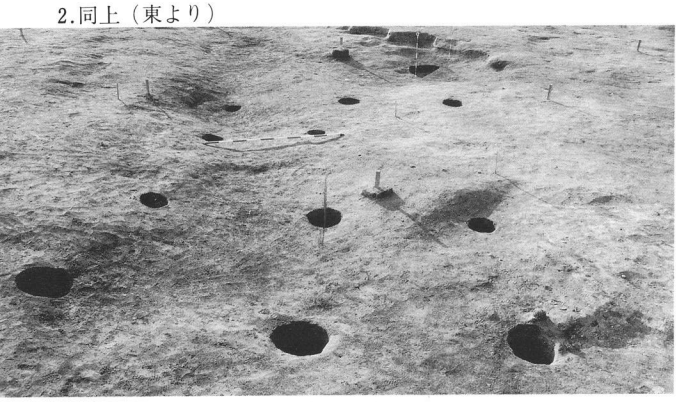


図版 4

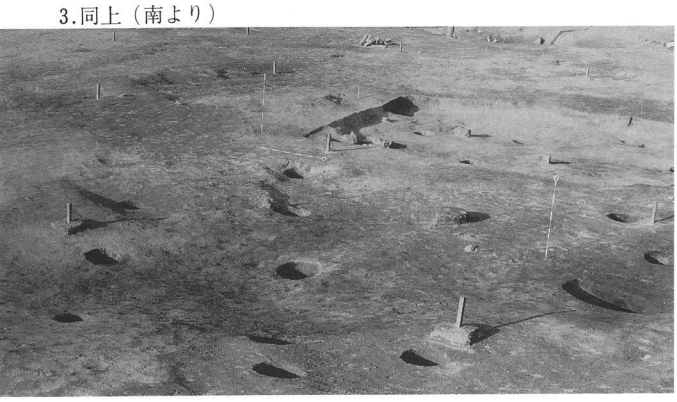
1.掘立柱建物址（北東より）



2.同上（東より）



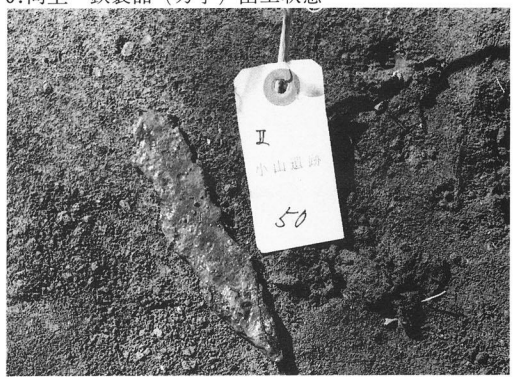
3.同上（南より）



4.掘立柱建物址墨書鉢出土状態

5.同上　周辺鉄釉茶碗出土状態

6.同上　鉄製品（刃子）出土状態

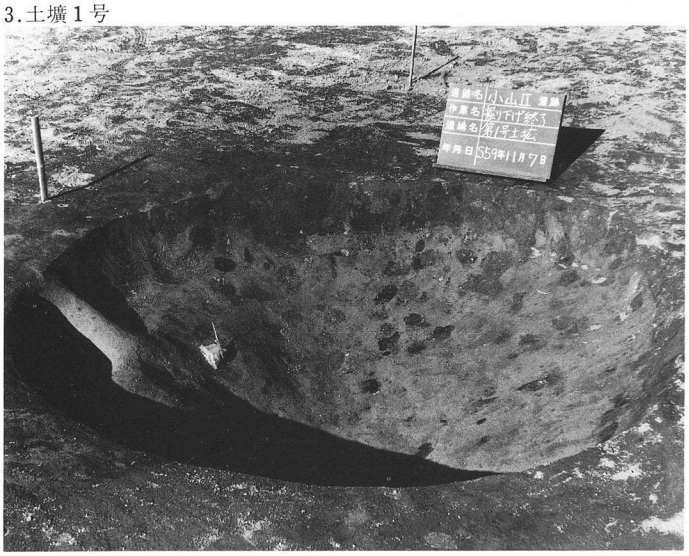


7.同左　古銭（寛永通寶）出土状態

1.小竪穴（北東より）

2.小竪穴、土壙２・３号、溝状遺構

3.土壙１号



4.土壙２号

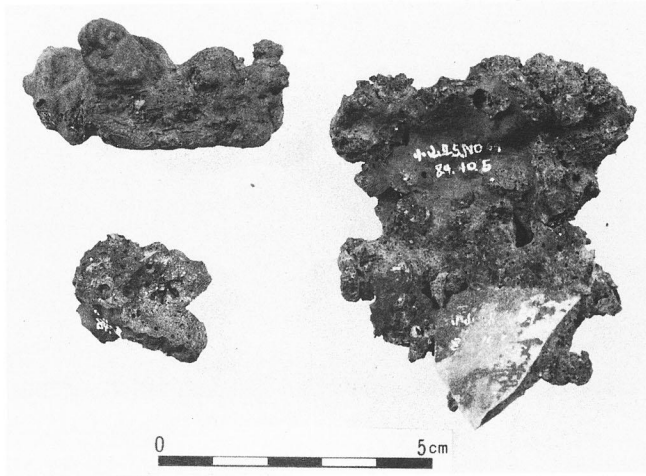
6.溝状遺構、柱穴群

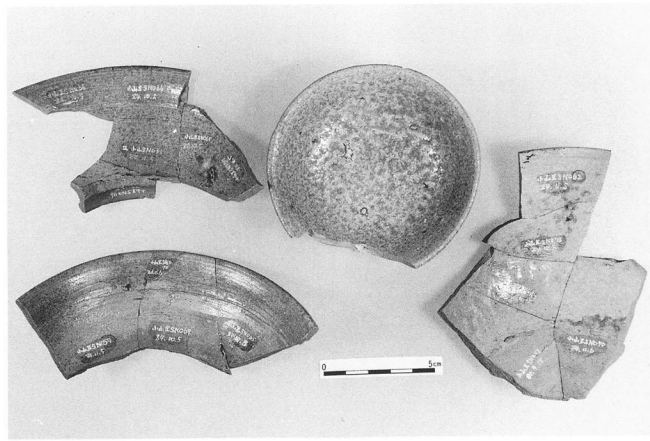
5.土壙３号

図版 6

1.鉄製品

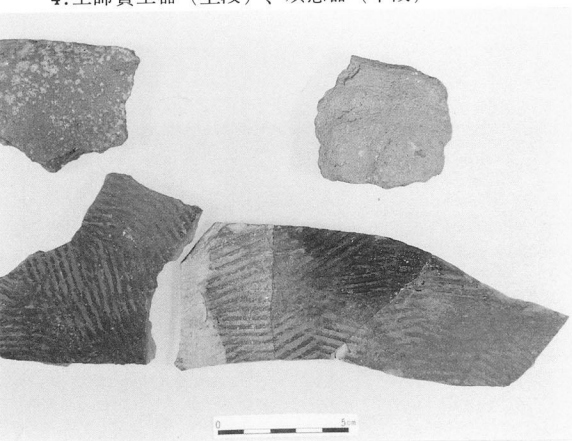
2.鉄滓





3.灰釉陶器

4.土師質土器（上段）、須恵器（下段）



5.内耳土器、陶磁器

小山第Ⅰ・Ⅱ遺跡
―― 緊 急 発 掘 調 査 報 告 ――

昭和60年３月15日　印刷
昭和60年３月20日　発行

編　集　**駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会**
駒ヶ根市上穂南２番15号
市立駒ヶ根博物館内
発　行　**南信土地改良事務所**
伊那市青木町合同庁舎内
長野県教育委員会
駒ヶ根市教育委員会
駒ヶ根市赤須町20番１号
印　刷　ほおずき書籍株式会社
長野市中越293番地